## 3　石川は「かわい」、富山では「かたかご」が“核”として

甲信越へ行くと、石川県と富山県の“奮闘”ぶりが大いに注目を浴びています。

両県には、地域の“核”ともいうべき実践園――石川のかわい幼稚園、富山のかたかご幼稚園――が存在し、石井方式の実践、普及拡大に情熱を持って取り組み、その活躍は今後も強い期待をかけられているといえましょう。

### 漢字学習 15 年の実績を誇るかわい幼稚園

かわい幼稚園は、金沢市内に、かわい、第二かわい、伏見かわい、みどりかわいの四つの幼稚園を持ち、さらに分園ともいうべき富山市の富山かわい幼稚園を合わせれば、園児数は 1,100 名近くになります。昭和 27 年に泉本町幼児園として発足し、42 年、かわい幼稚園に名称変更、44 年からいよいよ漢字学習の採用に踏み切りました。

さて、かわい幼稚園で、漢字学習を導入する際に、主唱者であったのが、現在、同学園の主事をしている山川稔先生です。その当時のいきさつについては、山田先生の自著『幼児は漢字が大好きだ』（登龍館発行）のあとがきに詳しいのですが、それを要約すると、こんな風になります。

昭和 43 年、園児数が 300 名から 500 名余りへと増えたころ、どうしたら幼稚園の運営をうまくやっていくかについて、あちこちの幼稚園を訪問して意見を聞いていたが、ちょっとある園で漢字を取り入れていると聞き、訪ねたのが、大阪・寝屋川市の旭学園（本書 265 頁参照）であった。

教室の至るところに漢字カードが貼ってあり、度肝を技かれた。いったい、幼児たちは本当に漢字を覚えるのかと疑心暗鬼であったが、園長の下牧重幸先生にいろいろとお話を聞いた。このことを理事長に報告すると、「それはすばらしい教育だ」と大いに賛意を示し、さっそく“本場”大阪へ先生方全員で見学に行った。小路幼稚園、文化幼稚園など何か所かを分散して見学し、帰ってから、全員で持ってきた資料や見学してきた内容を検討、「これはいけるのでは」という感触を得たのである。そしてその年（44 年）の 4 月より、本格的な漢字学習に入った。最初は恐る恐る、また先生方も無我夢中であったろう、と。

初めて園児の父兄を集めて行なった公開授業のさいに覚えた緊張感を、いまもありありと思い起こせると、山田先生はいいます。しかし、意外なくらい、父兄からの苦情や反対はなく、続けて催した石井先生の講演会にも、とくにお母さん方の関心は強く、たくさんの方が出席し、お話を熱心に聞き、質問もかなり出たといいます。

事実、漢字学習を実践し始めて 3 年経過した時点に、山田先生が園児の親に試みた“漢字教育についてのアンケート”の結果をみても、それが裏書きされたことがよくわかります。これは、138 名を対象に「賛成、反対」の意見などを聞いたものですが、結果は、賛成 104 名、反対 9 名、残りの 25 名は“わからない”という、極めて好意的なものでした。

そこで、実践園の先生方はもちろん、これから、子どもと漢学遊びを行なおうとしているお母さん方にとっても参考になると思われますので、このアンケートに表われた親の意見を少し紹介してみましょう。

まず賛成意見としては次のようなものがありました。

○　これまでは、本を読んでいても漢字に出会うと投げ出してしまったが、いまでは質問して読もうとする態度が現われ、読書に興味を持つようになった。

○　具体的なものや絵により漢字を理解させることは、無理がないから良い。
○　漢字はひらがなよりもやさしく早く覚えられるものだ、ということがわかった。
○　好奇心の強い年ごろであるから、覚える覚えないにかかわらず、漢字に接する機会を多く与えることは良いと思う。
○　漢字を覚えることにより、文を読み取る力が養われ、知識が高まるので良い。
○　新聞、ポスター、テレビなどから読める字を見つけて、喜んで読んでいる。
○　小学校に入ってから急に学習するよりも、今から自然に漢字に慣れさせておくほうが良い。
○　親が覚えさせようとしなくても、子どもは漢字を喜んで知ろうとし、覚える。
○　街に出ても、看板やポスターやコマーシャルなどの字句を読み、それがとても楽しそうである。

一方、反対というよりも、親として抱く心配の念として、次のような意見が出されました。

○　漢字を知っているということで、小学校に入ってから、学習する熱意を失いやすいのではないか。
○　漢字を教えようとすることで、かえって漢字嫌いの子どもにする恐れはないか。
○　漢字が読めるために、頭でっかちの子どもになる心配はないか。

いずれも初めて漢字学習と出会った親としては、もっともな心配であるかも知れません。が、これらがまず取り越し苦労であることは、石井勲先生の様々に語られている所説を知り、実践園での実際指導とその成果とを見れば明らかとなるでしょう。

このほか、そのアンケートに寄せられた意見のうちには、親の希望として、子どもの負担にならない程度に、日常生活のなかで自然に漢字に慣れるよう楽しい学習をして欲しいとか、小学校に就学したさい、漢字学習を受けなかった子どもをバカにすることのないような教育をしてほしいというような。注文″がありました。

現在でも、石井方式を全く知らない人がその実践を初めて見聞きした時など、こうした意見、要望が出ることは珍しくありませんが、いずれも実践のなかで、完全にぬぐい去られていくもの。だからこそ、数多くの父兄から石井方式は支持され、その賛同者が増えてきているのです。

ところでこのかわい幼稚園の漢字学習――漢字カード、漢字絵本、漢字カルタなどを使った。オーソドックス”なものはもちろんですが、大変ユニークなのが、テレビビデオ放送を駆使した学習でしょう。昭和 46 年当時から、早くもビデオ放送設備を導入、文字絵本などをビデオ化し、各教室に設置したテレビを通して子どもたちに見せ、楽しく遊び、学習する体制を整えています。これらのビデオは、台本を始め、制作はすべて、園の先生方が自ら担当し、すでに数十本の作品がストックされています。

かわい幼稚園ではまた、研究活動が極めて熱心に行なわれています。「保育の手引き」という先生方のための参考書から、子どもたちにどうしたら効果的に楽しく様々な学習、遊びを施せるのかをまとめた「よい子の文字あそび」「よい子の歌曲集」「体育あそび」「よい子のトレーニング」などが、その成果となって文献としてまとめられています。

さて、金沢市内には、このほかに昭和 58 年度に開園したばかりの新しい幼稚園、慶応幼稚園も、開園早々から漢字学習を取り入れ、5 クラス、125 人の園児が楽しく漢字で遊んでおります。

金沢市には約 40 の幼稚園があるものの、いまのところ、石井方式を採用しているのは、数園にとどまっています。ただし、導入を検討している幼稚園もいくつかあるそうですから、これから少しずつ増えていく可能性はあるものと思われます。

対象を石川県下に移しますと、河北郡七塚町にある木津幼稚園もかなり以前から石井方式を実践していて、昭和 49 年に、幼児期における能力開発を目ざして導入に踏み切りました。父兄には、反発どころか、かなり好評を持たれてスタートできたといいます。

「採用当初は教師も父兄も感動し、子どもたちの教育効果は絶大なものがありました」と園長の星名紀之先生はその当時のことを語っています。現在では、俳句遊びなども含めた漢字学習を、約 90 名の園児が、日々楽しく実践中というわけです。

## 富山の“先覚者”かたかご幼稚園―文部省研究指定校として

石川県のお隣り、富山県では“核”となって漢字教育の実践活動を担っているのは、何といっても真岡市伏木古国府にある、かたかご幼稚園といえます。富山県教育委員会の研究委託校として、あるいは文部省の指定校として、文字教育の実践研究に当たるなど、昭和 47 年度に石井方式を導入以来、常に県下の幼稚園をリードして来ました。

最近では、14 基のパソコンを導入し、一人ひとりの能力の段階を診断、そのカルテを作成して、個人個人の能力に応じたプログラム学習を始めています。そして、一日に園児一人当たり 4、5 分は必ずコンピュータを操作させることで、とくに“数の認識”をする能力の向上に務めているわけです。これは、漢字学習とともに、子どもたちの基礎能力の向上を図るうとするものといえます。

ここで、かたかご幼稚園の京谷準一園長が、漢字学習に取り組むキッカケになったことを、自ら紹介している一文（「母と子の新聞」昭和 57 年 5 月 15 日号）がありますので、それを披露してみましょう。

「『かたかご』とは、万葉集の編者・大伴家持が越中国司として在任中詠んだ歌から取った名で、毎年 4 月中旬頃、可憐な花を咲かせる『かたくり』のこと。昭和 46 年 4 月、万葉ゆかりの越中国庁北高台に開設したのが当園である。

翌 47 年、県下 50 余の私立幼稚園の先陣として、県教委の研究委託を受けて“幼児の文字に対する興味と関心”というテーマで実践研究を始めたのが、そもそも漢字教育との出会いである。

ついで昭和 48 年、49 年の両年度にわたって、文部省の研究委託校として、同じテーマで漢字教育を実践、研究し、50 年 3 月、石井勲先生を講師にお招きして、研究発表会を開いた。以後、今日まで毎年のように石井先生のご来園を願い、漢字教育は当園の教育の一つの柱となっている」

文中に出てくる、文部省の研究委託の成果については、主題「幼児の言語生活の中で、文字に関する興味や関心および能力がどのように発達するか」として、昭和 50 年の 3 月に研究発表要項がまとめられています。この研究結果によれば、石井先生が年来主張している様々な要点が、客観的にみごとに裏づけられていることがわかります。全部を紹介する余裕がありませんので、研究実験方法、研究の過程で明らかにされたこと、その成果などをいくつか示してみましょう。

研究は、昭和 48、9 年度の 2 年間にわたり、2 年保育の年中・年長

組、3 年保育の年中･年長組の総計二百数十名に対して行なわれました。

方法としては、漢字、ひらがな、カタカナに数多く親しみ慣れさせるため、保育室を中心とする園内の環境づくりを工夫し、各領域を通じて保育のなかにさりげなく文字を提示する指導法を研究実施して、文字の自然習得をねらった運動遊びやゲームを考案しました。さらに、子どもに提示する文字として、どんなものが適当であるか、年限別に試案を作成するなど、細部にわたってツメを行ないました。そして、もうひとつ重要なこと、つまり家庭における文字のあり方について、文字に関する興味や関心を高める家庭の環境づくりを求めました。とくに保護者の理解を深めるため、懇談会、家庭訪問、家庭教育学級などのあらゆる機会をとらえ、さらに諸アンケート調査を通じて、文字指導に対する従来の誤った考え方の是正にも務めたわけです。

こうした 2 年間の研究経過を踏まえて、一定の結論が導き出されましたが、次に、そのプロセスのなかで明らかにされたこと、研究の成果などを研究発表要項から箇条書きにして提示してみます。

※研究の過程において、明らかにされたこと

⑴ 子どもは文字の読めることに興味を覚えて、さかんに他の文字を読もうとつとめ、次には書こうとする。この時期は、筆順や字形がでたらめであるが、これを是正することをあせりすぎると、子どもは反抗心をおこし、それが文字習得への抵抗となり、逆効果となって現われることがある。

⑵ 子どもの文字に対する興味や関心及び能力の発達は、必ずしも知能指数に比例するとは考えられず、家庭環境や性格によることが多いと考えられる。

⑶ 絵本や童話などが、身の回りに豊かな環境に育っている子どもは、文字に対する関心や興味が深く、その能力も高い。

⑷ 漢字の読みについては、字画の多少に関係なく、子どもの生活との親密度、具象性によって左右されることがまことに大きい。

⑸ テレビをよく見ている子どもは、必ずしも文字を読む能力がすぐれていることにはならない。

⑹ 当初から、ひらがな、カタカナ、漢字を、順序にとらわれず提示していたが、漢字の習得は他に比べて非常に速く、氏名などの弁別についても、子どもにとっては漢字の方が能率的である。

※研究の成果について

⑴ 漸次文字に慣れ、名前などの弁別速度も速くなり、文字に対する抵抗感らしいものはほとんど見られなくなった。

⑵ 絵本や読み物について、従来、絵の多いものを喜び、文字の入っているものを避けていた子どもが、逆に文字のあるものを好んで選ぶようになった。

⑶ また、地域の図書館へ巡回文庫の図書を借りる子どもが増え、本の選択なども他人にまかせず、自分で選ぶものが多い。

⑷ カルタ取りなどの文字による遊びを喜び、これらの遊びから読字力を身につける習慣を育成できた。

⑸ 漢字の読解力の習得によって、かなだけの文章より、漢字かな混りの文章の方が読みやすいとして、これを選ぶため、子どもの年齢にくらべて、比較的程度の高いものを進んで読む傾向が見られるようになった。

⑹ 図書室や地域図書館、あるいは巡回貸出文庫から、文字入りの絵本や小学校低中学年向きの童話、伝記などを借りて読む子どもがだんだん多くなって来た。

⑺ 「文字への関心と理解に関する調査」(国語教育研究所案)を 4

回にわたって実施した結果、成果として次の諸点が現われている。

(イ)「この字何と読むの」というたぐいの質問をする子どもが多くなった。

(ロ) 町の立看板やポスター、また新聞やテレビに表われた文字に、積極的関心を示す子どもが多くなった。

(ハ)絵本に書いてある文章を音読する子どもが増えて来た。

(ニ)字に対する関心が強く、なんでもともかく読もうとする態度を身につけた子どもが多くなった。

(ホ)本を与えても「読んでくれ」というのではなく、自分で読むようになった。

⑻　読字能力の開発についての両親の態度は、自然習得の趣旨を良く理解するようになり、いわゆる教育ママ、あるいは“漢字ママ”といわれるような強制的、一方的指導の形を取るものはほとんど見られないようになった。

こうした研究成果に基づいて、漢字学習の積み重ねがなされてきた結果、園長の京谷先生によれば、「本園の漢字教育が、広く認められるようになり、今では、子どもたちの漢字に対する抵抗感は全くなく、読書力も身につき、漢字教育を受けて悪かったという父兄の声は皆無」と、その成果のほどを、自信を持って紹介してくれました。

そして、こうした成果が知られるようになったためか、とくに昭和 55 年以来、近郊の幼稚園に漢字学習が広がり、現に、実施園はかたかご幼稚園のほか 9 園を数えるようになったともいっています。

このほか富山市内には、金沢のかわい幼稚園の分園である富山かわい幼稚園が、石川県の本園とほぼ同様な実践を、創立当初の昭和 44 年から行なっています。

また射水郡には、実践園として、あおい幼稚園があります。第一、第二、第三の三園で、約 450 名の園児が漢字に親しんでおり、昭和 55 年から一せいにスタートしました。

実施の動機は、園長の上田晃道先生によれば、石井先生の講演を聞いてからといいますが、実は上田先生は、定時制高校に勤務していた経験があり、そこでの生徒の国語力の乏しさを痛感していたとのことで、漢字習得の容易な時期から漢字に親しんでいれば、そういうことも避けられるであろうと、当時考えていたといいますから、これもまた石井方式導入の要因の背景になっていたわけでしょう。

上田先生は、また、父兄から、4、5 歳児が、小学校二、三年生の兄や姉より漢字をよく読め、また読み方を聞かれているといった声が届くといっていますが、同時に、小学校へ上がると、その学校の先生の理解の仕方がいささか問題になる場合もあるといいます。たとえば、一年生の作文の時間にあおい幼稚園の卒園生か、名前を漢字で書いて出したら、ひらがなに直されてもどってきた、などの報告があるというのです。上田先生は、「小学校の先生は、子どもが漢字で書いたら『よく書けるね』といってやればそれでいいのですが……。小学校へ行って先生方と話し合ったこともあります。よく理解してくれる校長先生もいますが、一般の先生方のなかには、気にする人がありますね」といささか残念そうです。小学校との連携、協力については、このあおい幼稚園の経験に限らず、一般的に、解決すべき課題がまだまだ残っているということでしょう。